

ご挨拶

理事長 井谷五雲

皆さんいかがお過ごしでしょうか。今年に入つての新型コロナウイルスウィルスによる肺炎の蔓延も漸く沈静化の方向に向かいつつあるようですが、その脅威は世界的規模で見ましても、まだまだ強い警戒が必要な現今です。くれぐれも用心いただきたいと思ひます。

このコロナ禍によりまして生命だけではなく、経済・文化を含めて社会全般に様々な危機と自粛が叫ばれて、本協会も五月開催の第三十六回日本篆刻展とその関連行事及び八月の「中央研究会」中止いたしました。外部に目を向けますと読売書法展・全関西美術展も中止になりました。もちろん各地方の展示会などの諸行事も取りやめになつていくことでしょう。幸いにも古河市の篆刻美術館で例年開催されます「日本篆刻家協会役員展」は予定通り6月27日から開催することが決定しました。

本協会が例年通りの活動が再開できるまでの当面の間、会員の皆様に本協会の動きを知っていただき、また篆刻活動の一助になれば幸いと考へて「ニュースレター」を発行いたしました。

金石奇縁

会長 尾崎蒼石

今から二十数年前の事であるが、東京の古書店で一冊の古銅印譜を手に入れた。その名を「常熟席氏玉照堂旧蔵秦漢印譜」と言う。一帙一冊のやや大判である。収録の古印の数は壹千四百拾二印に及ぶ。その内容は漢の官職印並びに私印であり、最後に戦国私璽が十数点入っている。

さて、この印譜の制作年代であるが、編集者の席鑑が清初の人であり、この印譜も当然清初と言うことになる。今から約三百六十年前の編集と考えられる。私は篆刻を学んでいる関係から、当然戦国や秦漢の古印には興味があり、そして少しの古銅印を収蔵している。或る時、この印譜の第一頁に登載の古印「殿中都尉」を私が持つことに気付いた。何と言う奇遇であろう、正し

く金石奇縁である。さて、これから先はどうなることか。

尚、印譜の最後に、韓天衡、李剛田、孫慰祖、各先生の署名をいただいている。

永坂石埭余聞

理事長 井谷五雲

本年の中央研究会が中止の憂き目に遭つたが、実技の面では張耕源先生の「似顔絵篆刻」、研究の面では私の「永坂石埭の人と篆刻」が予定されていた。いずれも来年に順延ということになった。そこで今回のニュースレターの紙面をお借りして永坂石埭について少し述べておこうと思う。というのも永坂石埭という名前は残念ながらその人物の大きさに比して、現在ではその知名度はすいぶん低くなつてしまつて、まして人々に知られる存在ではなくなつてしまつていゝ。まして篆刻とどんな関係があるのかということになると、いささか説明を必要とすると思うからである。石埭翁が没して一〇〇年ほどになるが、哀しいかな同じような運命をたどっている貴人や芸術家が日本には多くある。それら先人の研究検証や再評価は我らの責任でなされなければならない課題でもある。特に次代を担う本協会の若者には是非とも実技のみではなく、多くの作家研究も行つて欲しいと思う。それは梅舒適先生創設の篆社以来の本協会の伝統でもある。

さて、石埭翁を知ることとは封建社会を脱して、近代化に突き進んでいく時代の、日本の芸術文化を知ることになると思われるが、本題は来年ということにして、石埭翁の酒にまつわる一面をすこし述べて、その序曲としたいと思います。

「石埭翁は酒を飲んだか？」

不躰ながら永坂家にお邪魔して取材させていただいているときに、曾孫の和也氏に尋ねたことがある。「いや、それはわ

「かりませんなー」と笑われて、答えに窮しておられたことを覚えているが、その対応ぶりは洵に生真面目で純粹なものだと妙に感動した。恐らくは石埭翁もこのような性格の人物ではないかと思つたからである。では何故に私はこのような愚問を発したかという、石埭翁には実に多くの酒にまつわる詩（当時は詩という漢詩のことである）があるからである。私も酒においては人後に落ちないのであるが、実は曾孫の和也氏は下戸だということである。身体的遺伝を考えると、ひよつとして石埭翁は飲めなかつたのではないか？などという実に凡俗な疑問を抱いたからである。今のところ私の結論は「石埭翁はよく飲んだ」ということになつてゐる。掲載の徳利は永坂家のものである。果たして石埭翁ご愛用のものか？ まあそんなことは別にして、辰砂で書かれた「天地一沙翁」を鑑賞している次第。

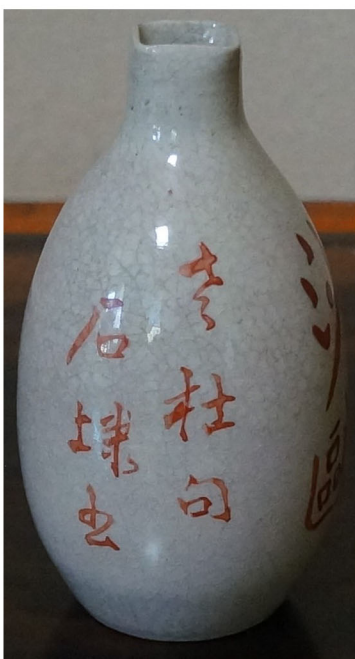
燈下独酌

燈下青熒紙窓 聳肩人与影成双 夜深竹屋蕭條極 一片詩魔借酒降

石埭翁の詩である。私は根拠なく（とは言つても無数に近く翁は酒に関する詩を詠んでいるが）翁は酒を飲んだと結論付けた。これからその証明をしなければならぬと、少々我が発言を後悔している。

深夜一人飲む。影を伴つて二人が語る。竹屋はひっそり静まり返るが、詩心がフツと沸き起こり、酒に乗じて詩魔降りてくるようだ。

ざつとこんなところか。作詩時期は記されていないが、『石埭詩稿』のページ繰りから判断するに、おそらくは丁卯年～辛未年の作と思われる。そうすると翁は実に弱冠二十二歳～二十六歳である。若き石埭が深夜酒を相手に詩稿を練る姿が目に見え。



中酒三日遂成一病力赴冷灰博士檀樂會賦此以呈乃次主人原韻

怕看醉墨流絲欄 花後閒情懺亦難 壁上殘瓢餘味貯 牀頭亂帙古香攤

酒終成病過三日 藥自与詩同一凡 醒檀樂今夕會約可能消受竹中寒

やはり制作年を記してはいないが、この作は癸卯年（明治36年）、石埭五十八歳のものと思われる。

題に「中酒三日」とある。即ち今風に言えば二日酔い、いや三日酔いになる。よほど飲んだものと思える。「ついに病を得たが、頑張つて冷灰博士（江木衷）の漢詩の会である檀樂會に出かけた」と。その頃は法学博士江木衷（号は冷灰）との知遇を得て、盛んに二人は詩会を通して深い交流を持った時期である。ついでながら、『石埭詩稿』第八冊にはこの詩に次いで、「酔後又賦」として七律一篇を記している。

酔後又賦、檀樂會席上次冷灰博士原韻賦此書懷

酒榼琴囊絕點埃 清宵有約此筵開 藉將薄病廢吟久 賺得新愁試飲來

竹雨晴知三伏始 梧風涼作一秋魁 自憐世路頻年味 酸到今番信似梅

こうなつてはもはや根拠はないが、と言わず、かくの如くして石埭翁は飲んだ！と言つて問題ないと思うが、さていかが。



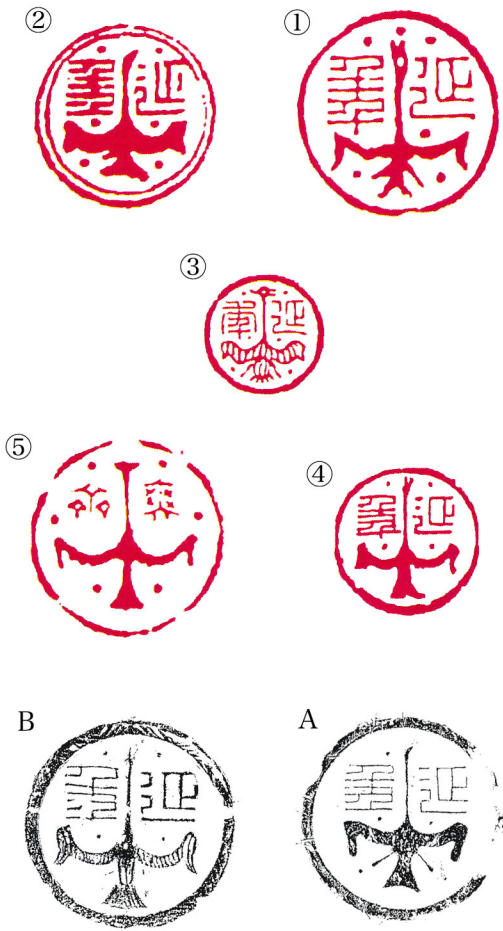
▲ 吳昌碩刻石埭翁用印

瓦當と印

副理事長 真鍋井蛙

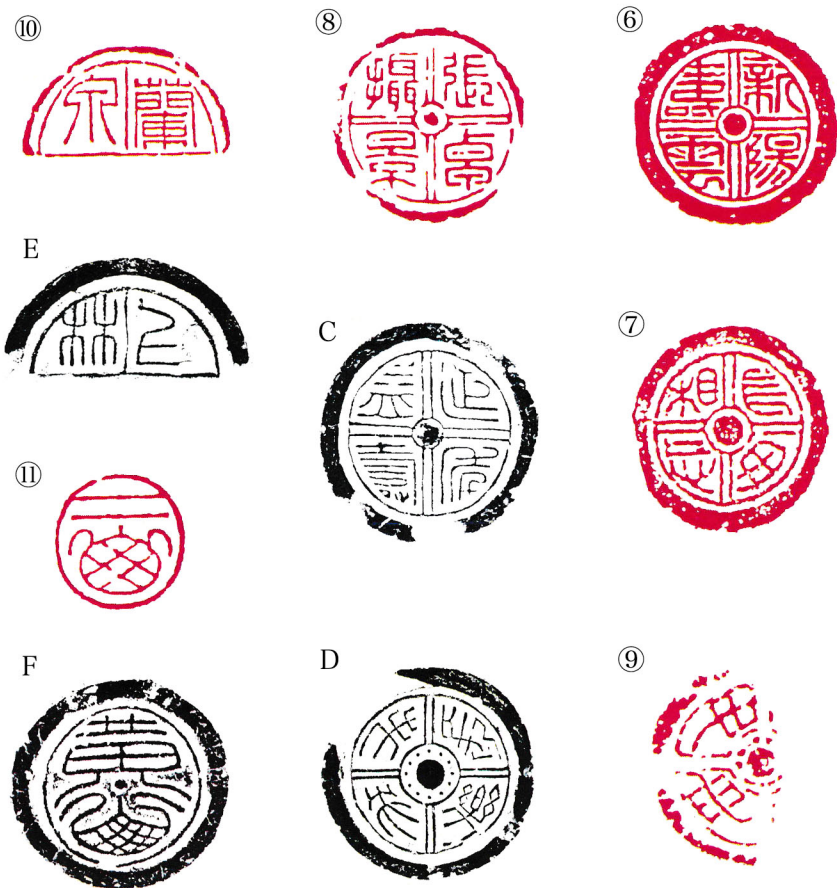
会員の皆様には筆硯益々御清栄のこととは存じますが世の中コロナの件で大変ですがお元気ででしょうか。何かお役に立てないかと「瓦當」をテーマに古人の印を例にあげ紹介してみたいと思います。

簡単にいえば軒先の丸瓦を瓦當と称します。この瓦當は、建物の屋根の一部であり、中国においては特に装飾的な要素が強く、紋様や動物を表したものの、また宮殿の名や吉語の文字を入れたものなど様々です。日本の古代においても東大寺や唐招提寺の寺院名の入ったものがあり、骨董屋で売買されたりもしています。中国では、この瓦當の文字を「瓦當文」と称し、特に漢代にその例が多く、発達の頂点に達したと考えられています。これらの出土地は秦漢の都城があつた陝西省が最も多く、次いで山東省、河南省ほかの各省から出土していますが、ニセモノ率も高いので買入される時は信用できる先輩に相談されることをお勧めします。次に古人は瓦當をどのように印に取り入れたかを見てみたいと思います。①陳鴻寿（1768〜1822）はこのA・B二つの瓦當をほぼ模したものでしょう。②汪嶸（1817〜1882）、③鄧爾雅（1884〜1954）、④鄧散木（1898〜1963）の印もほぼ同じ手法を用いています。⑤趙穆（1845〜1894）の印は延年を「爽齋」に入れ替えたものと思われれます。皆さんも号号を入れてみてはいかがでしょうか。



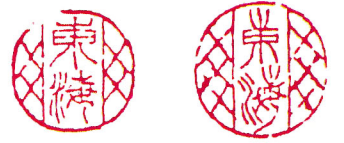
京都府住の作家の刻⑥「新陽寿雲」はおそらくこのCのあたりの瓦當を参考にされたものでしょう。外郭を少し欠いて風通しをよくしてやるともっと明るい作品になったのではないのでしょうか。文字も画面いっぱいには布字したため何か窮屈さを感じます。⑦黎簡（1747〜1799）、⑧呉樸堂（1922〜1966）なども同じ形式でしょう。また、干支「甲申」と入れた⑨千葉県住の作家の刻はDの「長楽未央」とほぼ同じでDの半分と考えてよいでしょう。風化の味をとらえた佳作だと思いました。他に⑩王大圻（1869〜1924）の「蘭泉」はEを、⑪趙之琛（1781〜1852）の「二山」はFを、⑫徐三庚（1826〜1890）の「東海」二種はそれぞれG・Hをモデルにしたことは明白でしょう。

皆さん、これを機会にぜひ瓦當を学んでみませんか。



三国志と漢内侯印

副理事長 喜多芳邑



① 亀鈕金印 後漢末～三国 (魏) 2.5×2.5×2

「三国志」美術出版社

② 亀鈕銅印 後漢末～三国 2.32×2.37×2.25 55.9グラム

「寧楽美術館の印章」

③ 亀鈕鑿金銅印 晋 2.54×2.50×2.71 82.8グラム

「寧楽美術館の印章」

④ 亀鈕鑿金銅印 晋 2.56×2.58×2.66 84.6グラム

「寧楽美術館の印章」

前年度、東博で開催された「三国志」の展覧会に於いて「漢内侯印」①の金印が展示されていた。図録解説によると「印の形状と字体から後漢時代後半のものと考えられる。」「魏の夏侯惇の子や夏侯淵の子が漢内侯となった。かれらも本品のような金印を授かったのであろう。」とあったが、質量と金印ということが気になった。数年前、奈良の寧楽美術館に於いて久米雅雄先生の講演会があり「寧楽美術館の印章」という本が出版された。②③④の「漢内侯印」の掲載中③④は質量が高く②と比較して後の時代ということである。福岡にある前漢初期の「漢委奴国王」金印は、2.3cm四方であり、①印がやや大きいのは、それより後の印であることがわかる。出土したのが中原から外れた山東省であることからして、材質が金であったことも理解できる。しかしながら、三国時代に魏の夏侯惇の子や夏侯淵の子が金印を授かったとはすぐに納得できなかった。①は「山東新出土古璽印」に掲載され、時代は「漢」のみ。大きさは2.4cm四方の記載である。東博では無理矢理「魏」まで引き延ばされて表記された気がしてならない。学者ではないので時代考証はこの辺にしておいて、三国志登場人物中、誰が

「漢内侯印」を所持していたのかに興味湧く。漢代の身分制度では、皇帝、諸侯王、列侯に次いで漢内侯がある。魏・呉・蜀おなじである。蜀では、関羽・張飛・趙雲・諸葛亮が列侯で、黄忠が漢内侯である。黄忠といえば蜀の五虎大将の一人に数えられる老将である。

魏では張遼である。後漢末の動乱期に丁原・董卓・呂布に仕えた後、曹操の配下となり軍指揮官として活躍した。『三国志演義』では呂布の武将の「八健将」として登場する。曹操が決死の関羽を包囲した際に、張遼が説得に当たり、関羽の「罪」を説き、曹操へ帰順させることに成功する。赤壁の戦いにも従軍し、敗走する曹操に付き従う。華容道において曹操と同様に関羽と遭遇したが、関羽は情により張遼を見逃す。

黄忠・張遼ともに三国志では魅力ある登場人物あり、彼らが②と同様の「漢内侯印」を所持していたと考えると、印を見るのもまた楽しいものである。

